

平成21年5月27日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520042

研究課題名（和文） 術数学と陰陽五行説の中世的展開

研究課題名（英文） The formation of the study of Shushu in the light of the development of the theories of yinyang and five phases in the middle ages

研究代表者

武田 時昌（TAKEDA TOKIMASA）

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号：50179644

研究成果の概要：中国における自然哲学の理論構築には、陰陽五行説が大いに用いられた。これまでの研究では、主としてその起源と漢代における政治思想への影響が考察されてきたが、本研究では、三国時代以降にどのような展開があったのかを明確にし、その理論構造の特色を探った。そして、先秦の方術が、漢代の思想革命を経て、中世の術数学へと変容する過程を考察し、中国科学思想史として術数学を総合的に考究する研究基盤を整えた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：中国哲学・術数学・方術・陰陽五行・陰陽道・五行大義

1. 研究開始当初の背景

陰陽五行説に関する研究を振り返れば、戦国末期からの成立史や漢代の政治思想でも役割については数多くの研究があるが、その中世的な展開については中村璋八氏の五行大義研究を除けばきわめて乏しい。

天文律暦学に関する研究も堀池信夫氏の『漢魏思想史研究』（明治書院、1988）川原秀城氏『中国の科学思想：両漢天学考』（創文社、1996）に詳しい議論が展開されているものの、中世術数学への史的展開を視野に入れるものではない。また、中国哲学における科学思想史的な研究としては、山田慶兒氏や坂出祥伸氏の研究に先駆的な論考を見出す

ことができるが、本格的な専著としては中国医学の分野における石田秀實氏の研究（『中国医学思想史：もう一つの医学』（東京大学出版会、1992）『こころとからだ：中国古代における身体思想』（中国書店、1995）など）があるくらいで、術数学を直接に取り上げたものはない。

陰陽五行説の中世的展開及び術数学の形成を考察するには、その前提として漢代の科学思想、とりわけ天文律暦学派や京氏易、緯書の研究が必要である。

武田は、これまでに緯書に展開された暦法を「緯書暦法考—前漢末の経学と科学の交流」（山田慶兒編「中国古代科学史論」、

pp. 55-120, 1989) で議論し、「京房の災異思想」(中村璋八編『緯学研究論叢』pp. 66-84、平河出版社、1993) で京氏易に論及し、その後も易緯を中心とする科学思想の考察を試みている。中世に関しては、「中世の義疏学と緯学」(「信州大学教育学部紀要」70、pp. 344-333, 1990)「中世の数学と術数学—科学と宗教の習合点をめぐって」(麥谷邦夫編『中国中世社会と宗教』道気社、pp. 203-221, 2002) 等の論考を発表してきた。一方、陰陽五行説を中心とする自然哲学については、『物類相感をめぐる中国的類推思考』(『中国21』15 pp. 107-126, 2003) においては、物類の感応関係をめぐる言説を考察し、陰陽五行説とは多少異なる物類の把握方式が古来より存在し、中世以降の自然哲学にも影響を与えたことを指摘した。また、「精誠の哲学」(『中国学の十字路 加地伸行博士古稀記念論集』研文出版、pp. 84-99, 2006) において、先秦から漢代に至る自然哲学的言説で、中世以降に受け継がれた思考様式に「精誠」というコンセプトがあること、それが自然学や占術の理念基盤に用いられていることを論証した。中世に関しては、「中世の数学と術数学—科学と宗教の習合点をめぐって」(『中国中世社会と宗教』、pp. 203-221, 2002) 等の論考を発表することにどまっている。

武田は、以上のように離散的な研究を行ってきたが、さらに 2006 年度より中世術数学の本格的な研究に着手することにし、まずは学問的輪郭を明らかにすることを試みた。その作業を開始して痛感したことは、中世の術数書の復原の必要性である。なぜならば、中世に存在した術数書は大半が散佚してしまっており、その全容を窺うことは容易ではないからである。しかも、現存する宋代以降の術数書の大半は邵雍の先天易の影響によってかなり理論変容しており、その内容を窺うだけでは中世の術数書の情報を選別することがきわめて困難である。

数少ない例外として、日本の陰陽道史料における六壬式盤の理論的考察が小坂真二氏によってなされているが(『安倍晴明撰『占事略決』と陰陽道』、汲古書院、2004)、中国中世の術数書にまで遡及するものではない。

そこで、術数学の理論構造を分析するために、陰陽五行説の中世的展開に焦点を当て、関連資料のデータベースを構築したうえで、理論分析を試みることにした。

2. 研究の目的

中国には、自然科学の諸分野において先進的な発見、発明を成し遂げるとともに、そこで得られた理論、知識を基盤とする自然哲学を大いに発展させてきた。とりわけ、自然現象の法則性や物類の相互関係を定式的に把握し、自然をアナロジーにして人倫社会のあ

り方、人間の生き方等を考究しようとするところに、中国的思考様式が大いに発揮されている。それらの理論構造と史的展開を総合的に研究すれば、世界文明史においてきわめてユニークな科学思想の歴史を描き出すことができるだろう。

中国における自然哲学は、老子と易を二つの中心するものであり、その理論構築には陰陽五行説が用いられた。その形成過程を総合的に考察することは、さほど容易なことではない。なぜならば、先秦において成立した老子、易という書物に展開された哲学がそのまま敷衍されたのではなく、漢代に確立した陰陽五行説もそのままの形で後に受け継がれたわけではないからである。

中国における自然哲学の系譜を明らかにしようと思えば、経学確立させて以降、三国時代から隋唐を経て北宋の新儒学が興起するまでの中世における展開を明確にする必要があるように思われる。しかしながら、これまでの研究は、個別的、離散的なものであり、中国の自然哲学の構造や特質を思想史的に考察しようとしたものは皆無であると言っている。

とりわけ、中世には自然科学の諸分野と易を中核とする様々な占術が複合的に絡み合った中国に特有の学問分野である術数学が形成され、多種多様な術数書が著されたが、その考察が手つかずのままになっている。そのことが、中国における自然哲学の展開に対する総合研究を遅滞させている最大の要因である。

術数学の理論構造を生み出すパラダイム的な役割を果たしたのは、陰陽五行説である。これまでの研究においては、陰陽五行説の成立過程や配当説、それを援用した漢代の政治思想等に詳しい考察が試みられてきた。しかしながら、三国時代以降の史的展開や理論構造の特質については、十分な検討がなされているわけではないように思われる。

そこで、天人感応、物類相感等を含めた広義の陰陽五行説が中世以降にどのように変容し、自然哲学や自然科学の基礎理論としてどのような作用したのかを具体的に考察し、方術から術数学への変容過程を探ることで、術数学研究の突破口を開こうとするものである。

3. 研究の方法

三国時代以降に数多く著された術数書は、陰陽五行説の中世的展開を具体的に明らかにすることができる史料であり、日本の陰陽道にも影響を与えた注目すべきものであるが、主要な著作の多くが散佚したこともあって、理論的な側面からの研究はあまりなされていない。

しかしながら、日本にはいくつかの術数書

が伝存する。その代表的な著作は、隋の占い博士（太常の官）として活躍した蕭吉が編纂した『五行大義』である。そこには当時存在した術数書が多数引用されており、資料集としてもきわめて有益である。また、永観二年（984）に丹波康頼が編纂した『医心方』にもその方面の佚書、佚文が多数残存し、大いに注目すべきである。

その他に、『占事略決』等の陰陽道書、革命勘文等にもしばしば引用されている。したがって、それらの佚文を集録すれば、中世に流布した術数書をある程度の復原することが可能である。

そこで、宋代以前の術数書に関して、日本残存典籍を調査し中世術数書の輯佚作業を行い、そのデータベースを作成したうえで、その内容を検討し、陰陽五行説に関する理論解析を試みる。

具体的な作業は以下の通りである。

(1) 中世術数書の復原、輯佚データベースの作成

『五行大義』について、諸本との校合作業を行って、電子テキスト化し、その引用書データベースを作成する。また、他の著作や類書等に引用された佚文を集録して、可能な限りの復原を試みる。

『大唐陰陽書』等については、日本にも早くから伝来しているので、『占事略決』などの陰陽道書や革命勘文などの日本の典籍に佚文が散見する。それらについては、日本史研究者によって一部が研究されているが、包括的なものではないので、国内の図書館等に残存する諸本を新たに調査して、輯佚作業を行う。

作成した術数書データベースは、術数研究者と共有できる研究情報としてホームページ上で公開する。

(2) 術数書読解ワーキングの開催

データベース作成及びその内容的分析のために、内容を綿密に検討する。思想史、科学史関連の研究者を集め、『五行大義』等に引用された術数書を読解する共同研究会を開催し、多角的、複眼的な見地から検討を加える。

(3) 術数書における陰陽五行説の構造的把握

データベース化した中世術数書から、陰陽五行説に関する言説を抽出し、その理論分析を試みる。特に、六壬、遁甲、太一、九宮、孤虚、風角といった諸術に対する理論的な考察を試み、術数学の基盤となった理論を明確にし、その構造的把握を試みる。

漢代の象数易（京氏易）や緯書で展開されている陰陽五行思想が、中世の術数書にどの

ように影響を与え、あるいはどのように変容したのかを検討し、その史的展開を明らかにする。その考察対象としては、数多くの引用が見られる『五行大義』『医心方』を基軸とし、そこに展開された論説を系統的に整理することで、陰陽五行説をめぐる論説の鳥瞰図を作成する。

そして、中世における陰陽五行説の史的展開を明確にし、中世の術数書が、当時の自然哲学、科学思想として、どのような数理的作用を果たしたのかを検討する。

4. 研究成果

術数学というのは、まだ十分に考究されていない未開拓の領域である。理論構造が難解であるとともに、著作の大部分が散佚してしまっていることも、学問的輪郭を把握しがたくしている障壁となっている。しかしながら、『五行大義』に引用された諸書を系統的に整理し、その内容を精読すると、陰陽五行によって理論化された中国占術の数理構造が十分に推察することができる。

陰陽五行説の中世的展開は、『隋書』経籍志に著録された一群の書物の存在に、示唆的に語られている。すなわち、子部五行類には、易占、風角、九宮、太乙、遁甲、六壬、風水、相宅、占夢……多種多様な術数書が見られる。それらの理論的中核は、『五行大義』に包括的に取り入れられている。

そこで、『五行大義』の論説を詳しく検討すると、中世、近世の術数書において展開されている占術の諸技法は多様な形式をとっているが、その数理を分析すると漢代に盛行した天文暦数学や京氏易に共通する理論基盤があること、さらにその起源は先秦にまで遡及できるものがあることが判明した。

とりわけ、近年出土した秦簡の日書や前漢初めの馬王堆帛書と強い類似性を感じさせており、また緯書説との密接な関連性を見出すことができた。また、『五行大義』との比較において、日本に残存する陰陽道史料を検討すると、暦注に応用された占いや医薬の世界における禁忌や呪いは、古代の占術理論によって定式的に導出された配当説に依拠するものであることがわかる。

また、古代、中世の諸技法は、宋代以降の術数書や暦注等に継承されており、漢代象数易から宋代以降の先天易へという流れによって、理論的な変容が生み出されていることも明確になった。ただし、数理的説明は曖昧なものになっており、配当説だけが受け継がれていった側面が強いことが指摘することができる。そのことは、『五行大義』や陰陽道書を読み解かないと、十分な理解が得られないということを示唆している。

得られた考察結果を総括すると、最も注目

すべきことは、陰陽五行によって理論化された根幹部分は、通時代的にほとんど変わっていないということだ。とりわけ、近年に発掘された先秦から漢初にいたる簡牘、帛書の新出土資料と密接な関連性が指摘できる。現存する資料の多くは最終的な占断や配当結果だけを記したものであり、占術の数理をさらに究明するためには、新出土資料を手がかりとして秦漢期に立ち戻って検討する必要があるだろう。

そこでの問題圏は、陰陽五行説のみならず、天文曆数学、医薬学等の基盤にある科学知識全般にわたるものであることは言うまでもない。当時の自然学と易学、占術との複合体として考究する必要がある。

つまり、今回の研究によって、中世術数書との連関という視座で、中国古代の占術理論を遡及的に考察するという新たな課題が浮上してきたのである。新出土資料の解説によって、方術から術数学への変容過程がさらに明確になるにちがいない。

以上の考察を通して、先秦の方術から中世の術数学への変容過程を具体的に明らかにすることができたように思われる。それによって、術数学研究の第一歩を切り開くことができたことが、今回の研究の最大の成果である。術数学の基本文献を活用できるようなデータベースに加工することができたので、当初の目標であった術数学の本格的な研究プロジェクトを立ち上げる環境を十分に整えることができたように思われる。

推進した研究の具体的な内容と成果をまとめると以下ようになる。

(1) 中世術数書の輯佚データベースの作成

①多数の術数書が引用されている『五行大義』の本文を、元弘相伝本の写真版から復元し、異体字処理を含む本文校訂作業を行ったうえで電子テキスト化し、さらに術数書の佚文を集録し、書名ごとに整理して本文データベースの作成を試みた。完成した『五行大義』の電子テキスト及び引用書の輯佚データベースは、HP上で公開した

(<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~take da/>)。

②『医心方』『占事略決』等の術数学基礎資料についても電子テキスト化し、そこから散逸した中世の術数書を復原して佚文データベースを作成しており、今後も同様の作業を続行するつもりである。

(2) 術数書読解ワーキング、特別講演会の開催

①データベース作成及びその内容的分析のために、中国哲学史、道教、科学史関連の研究者を集め、『五行大義』を会読する共同研究会を2006年5月より2008年3月まで毎月

1回開催した。それとは別に『医心方』『春秋繁露』及び郭点楚簡・馬王堆帛書の『五行』に関する読解ワーキングをそれぞれ随時行った。

②2007年7月21日(土)に水口幹記助教授(浙江工商大学日本文化研究所)を招いて、特別講演会を開催し、『天地瑞祥志』について講演してもらい、会読メンバーとともにそこに引用された術数書に関する討論を行った。また、2008年12月20日には茨城大学に来訪中のベトナム漢喃研究所の丁克順(DINH KHAC Thuan)教授を招いて特別講演会を併催し、研究会の参加者に中国、韓国の研究者もまじえてアジア世界の術数学研究の現状と課題を討議した。

③中国、韓国で術数学研究を推進する研究者グループと活発な研究交流を推進した。その結果、2009年8月に術数学研究の国際ワーキングを京都で開催することになり、その準備に取りかかった。

(3) 術数書の諸技法の理論的考察

①『五行大義』『医心方』を手がかりとして、術数書に展開された諸技法や配当説の構造的把握を試み、中世における陰陽五行説の特色を探った。さらに中世の術数学が方術の理論との強い連続性を有することを視野に入れながら、術数学の理論的基盤に遡及的な考察を試みた。

②得られた研究成果に基づき、研究論文2篇を発表し、さらに『東方学報』京都の2009年度号などに発表する予定である。また、『五行大義』をめぐる論考及び訳注については、研究論文集として近々刊行する予定である。

また研究成果を踏まえて、学会発表を積極的に行い、本格的な術数学研究プロジェクトの立ち上げを提言した。

日本科学史学会2007年度年会でのシンポジウム、日本科学史学会2008年会において、中国科学思想史における術数学の役割を明らかにすることで、中国科学史研究における術数学研究の意義を提言した。また、天文学史研究会(談天の会)において、G. Leinss氏と共同で暦注に関する研究発表を行った。

和方鍼灸友の会の多賀大社フォーラム'07では、東洋医学における陰陽五行説の理論的特色を明らかにし、現代の鍼灸医療における今日的な課題に論及した。大谷大学中国文学会における講演では、方術から術数学への変容について新出土資料を手がかりにした新考察を発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①TAKEDA Tokimasa, The Formation of the Study of Shushu 術數 and its Development in the Middle Ages, HISTORIA SCIENTIARUM、査読有、17-3、2008年3月、pp.161-174

②武田時昌、中国における自然哲学の理論構造、三島海運記念財団研究報告書、査読無、44号、2007年11月、pp.97-101

〔学会発表〕(計5件)

①武田時昌、科学と占いのあいだ 簡帛資料の新証言、2008年度大谷大学中国文学会学術公開講演会、2008年12月19日、大谷大学

②武田時昌・Gerhard Leinss、暦と迷信をめぐる新考察、第2回天文学史研究会および談天の会第41回例会、2008年12月19日、同志社大学

③武田時昌、明末清初の数学研究、日本科学史学会2008年年会、2008年5月24日、電気通信大学

④武田時昌、陰陽五行のサイエンス、和方鍼灸友の会 多賀大社フォーラム'07、2007年9月1日、多賀大社

⑤武田時昌、西学受容と近世の科学知識、日本科学史学会2007年度第54回年会、2007年5月26日、京都産業大学

〔図書〕(計1件)

武田時昌・富谷至・船山徹・井波陵一、漢籍はおもしろい、研文出版、2008年2月、pp.188
〔総説 漢籍の時空と魅力〕(pp.7-35)を分担執筆)

〔その他〕

術数学基礎資料データベースの公開 HP:
<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~takeda/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武田 時昌 (TAKEDA TOKIMASA)
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：50179644

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし